



▶毎年9月1日の関東大震災になると、高齢の南相馬市民が誇らしげに思い出すのが、今は無き「無線塔」のこと。第一報をアメリカに打電し、各国からの救援が開始されました。▶そして東日本大震災・原発事故が起こると、「無線塔」と「福島原発」の奇妙な符合が語られるようになります。ともに時代の最先端として日本や関東のために活躍や貢献をしたにもかかわらず、無用になったり事故で簡単に見捨てられていることが重なり犠牲さえ強いられています。▶「無線塔」は残っていれば「産業遺産」で、語り継ぎたい郷土の誇りです。「今さら無線塔か」と仰らないで＜裏面・記事＞をご覧ください。

会員の疑問・市民の声これでもいいのか「安保法制」のメディアの報道

○安保法制に賛成が読売・産経・日経新聞、反対抗議しているのが朝日・毎日・東京(中日)新聞・河北新報などと言われています。福島民報・福島民友はどうなのでしょう？

○NHKテレビはいい番組が多いのに、ニュースワッチ9をはじめニュース報道は政府与党の広報局に成り下がり、もはや公共放送ではないという声も。渋谷の放送センター、各地のNHKに「公正な報道を」の抗議デモも起こっています。他テレビ局も新聞社も政府与党にコントロールされ要警戒。原発報道のように騙されない賢さや、見抜く力が国民に要求されます。

○今国会で国民は「憲法の立憲主義」「法の支配」を学び、「デモ」に目覚め、若者に希望を持てたことが救いとの声も。また解説評論家、メディアを厳しく見る目もできました。



新刊紹介

◇広瀬 隆『東京が壊滅する日』ダイヤモンド社 ¥1,600+税

40年前、広瀬氏の『危険な話』『東京に原発を』『眠れない話』など原発関連の本でショックをうけ、その予告のように福島第一原発の事故が起きました。事故から4年半、氏のこれまでの著作や主張をまとめたのがこの本です。今後の廃炉や、全国に及ぶ放射能の人的被害には暗澹たる予測をされていて、深刻な気持ちになります。広瀬氏の主張が杞憂であることを願っています。

◇香山リカ・小鷹昌明『ドクター小鷹 どうして南相馬に行ったんですか？』

＜上記＞の本と対称的な少し希望を感じられる本です。埼玉県生まれの 七つ森書房 ¥1,500+税 医師小鷹さんが、人生の転機として自らの意志で「原発に一番近い病院」の南相馬市立総合病院に勤務します。そして南相馬での生活を楽しみ、乗馬を学び、相馬野馬追い祭の神旗争奪戦に参戦します。精神科医師香山リカさんとの明るい手紙のやりとり、悩みの解消法をまとめたものです。

＜事務局より＞

◆10月18日の「総会」は2010年以来、震災後初です。ご出席をよろしくお願いいたします。事務局員一同、仕事の合間の忙しい中で頑張っています。

◆10月9日はノーベル平和賞の発表です。「憲法9条を守った日本国民」「九条の会」が受賞できるのか。「戦争をしない国・日本」をアピールしたい！

◆関東の方から「あのガードマンのようなヒゲの隊長も、秘密法担当の女性議員も福島県出身なんですね」と言われ悔しかったので、「武力でなく医療面で国際貢献した先駆者は野口英世ですし、日米開戦を直前まで回避しようと努めた朝河貫一も福島県出身ですよ」と返してやりました。(山崎)

＜「はらまち九条の会」事務局員連絡先・市外局番はTEL0244＞

○会長：平田慶肇(ひらた けいいち) TEL24-1211・FAX24-4825

○事務局長：山崎健一 TEL090-7527-5453 Eメール：yamazakiken1@gmail.com

○会計：井上由美 〒975-0031南相馬市原町区錦町1-43井上薬局内 TEL22-7511・FAX26-0892

○石田賢二 TEL080-5556-4037 ○早坂吉彦 TEL22-0326 ○番場恵子 TEL22-0715

○ホームページ担当：大浦祥見 TEL24-0704 ○志賀勝明 TEL090-9530-5524

○栗村文夫・桂子 TEL090-8851-6904 ○田中徳雲 TEL090-2796-4066



関東大震災 福島発 祖父の打電 原町から一報

最先端の無線塔通じ海外へ 支援集まる

孫「原発も最先端…復興へ英知再び」

「東洋一」の無線塔 世界へ

1960年代後半に撮影された原町無線塔。南相馬市博物館提供



米村恵子さん

開局のころ、無線機の前に座る米村嘉一郎さん＝南相馬市博物館提供

嘉一郎さんは、旧通信省警城無線電信局（福島県富岡町）の局長だった。1923（大正12）年9月1日の関東大震災の時、横浜港に停泊中の船の救助に乗り、世界に伝わった。嘉一郎さんはその後も1週間、不眠不休で被災状況を伝え続けたという。日本には40カ国以上から支援が相次いだ。

世界に情報を発信できたのは原町（現南相馬市）に当時、最先端の無線塔があったからだ。高さ201メートルで、「東洋一」とも称されたという。日本から外国に無線通信ができる通信省の唯一の施設だった。

「本日正午、横浜において大地震に次いで大火災起り、全市ほとんど猛火の中にあり……」。92年前の関東大震災。福島県の無線電信局長だった米村嘉一郎さん（1976年に92歳で死去）は一報を海外に初めて伝え、世界から支援がすくなく集まるきっかけをつくった。「その福島が今度は被災地になった。復興のために最先端の英知を再び結集してほしい」。孫の恵子さん（66）はそう願う。

国家の大事業 受け入れの歴史

「英知の再結集」孫は願う

4年前の3月11日に東日本大震災が起きたとき、東京に住む恵子さんの頭には、真っ先に祖父の嘉一郎さんのことがよぎった。

恵子さんが小学生のころ、嘉一郎さんは都内で隣りの家に暮らしていた。控えめな性格で、当時のことを自分からはほとんど話さなかったが、時々、雑誌に載る記事で祖父の仕事ぶりを

知った。恵子さんの父の磐雄さんの名は、磐城市（現いわき市）から一字をもらったことも知った。

関東の人たちを救おうと福島で奮闘した祖父を思うと、4年前の原発事故にはやるせない気持ちがかみ上げてる。

「無線も原発もその時代の最先端の技術。地元の人たちは誇りに思ってた。私も受け入れてきたはず。それなのに、その原発で地元の人々が苦しんでいる」

孫としての今の思いを書いた。実は、父へのプレゼントの気持ちを含めていた。父は、生まれ故郷の富岡町を放射能で汚染されたうえ、昨年2月には長年連れ添った母に先立たれた。投書で父を元気づけたかった。その父も昨年10月に後を追うように他界した。

塔を思い起こす人 いまも

警城無線電信局が開局したのは関東大震災の3年前。国際無線電信局の建設は、国家を挙げてのプロジェクトだった。

原町市史によると、通信省が商用として建設を計画。無線電信局を千葉県に持っていた海軍は、電波の混信を嫌って200メートル以上

離すよう求めた。原町は国に土地の無償提供を提案し、交通や電力供給が便利で地盤も強固だったことなどから白羽の矢が立った。

無線塔は1982年に解体され、現存していない。だが、南相馬市博物館の2上文学芸員によると、東日本大震災後、市民の中には無線塔を思い起こす人も少なくないという。

「関東大震災では、無線塔からの発信が『日本を救え』という運動を世界に起こした。東日本大震災の時に世界中から受けた支援と重なっているのです」

さらに、国のために無線塔の建設地を提供したという経緯が、首都圏のために

▲2015年3月31日『朝日新聞』神奈川版、同記事が4月15日『朝日新聞』福島版にも掲載。
○「原発」事故後、「無線塔」に関心が深まっていますが、これは朝日新聞神奈川県横須賀支局長前田基行記者の記事です。前田記者は原発事故後の福島県や南相馬市に寄り添う取材を重ねていて、「プロメテウスの罠」のヒットは同記者の「防護服の男」から始まりました。